

## 伝統ということ



小林 庄 助

指揮者の手が静かに止まる。音楽がやむ。一瞬のしじまがあつたかと思うと、やがてそれを突き破るように拍手がわく。「やったア！」と私は確信めいたものを感じ、さらに強く拍手をおくる。会場はその潮さいに包まれてしまふ。

今指揮を終えたばかりの千葉先生の顔も、生徒たちのどの顔も紅潮していて輝いて見える。審査員の先生が、「生徒さんたちの一人一人の顔を見ると、全くあどけない中学生なのに、音楽だけを聞いていると、大人のふたが演奏したかのように、ほんとうにすばらしい。この曲（序曲コリオラン）の曲想もじゅうぶん生かされています……」などという講評にまたしても拍手がおくられる。

生徒たちの満足そうな顔がもどってくる。今までの労苦をいたわり休息させたいところだが、時計を見ると午後四時半をまわっている。この会場（郡山市立行徳小学校）から石川町までは車で約一時間。生徒たちは直ちに帰路につかなければならないということになり、夕色のせまった会場を、バスであとにした。

結果はやはり優秀賞であつた。彼らは東北決勝大会に出場する権利を獲得したのである。早くこの朗報を知らせてやりたい。しかし私の乗っている車は楽器を運搬する小型のトラックである。コントラバスが五つ、それにテンパニーやチェロがのせてある。生徒を乗せたバスは四十分まえに出発しているのだから追いつくはずはない。

すでに国道四号線は夜景につつまれていた。運転するのは教頭の遠藤先生。その隣の助手席に私がいる。そして私は管弦楽部の三年連続東北大会出場の偉業をおして、しきりに伝統ということを考えて。

まずA子のことだ。彼女は運動をしている時首すじをおかしくした。医師の診察を受けたがこの神経がおかされたかはわからないまま、とにかくヴァイオリンをひくことを禁じられてしまった。たいがいならそのまま管弦楽部から脱落していくところだが、彼女は踏みとどまった。そして一、二年生のパート練習の相手をしたり、管弦楽部のこまごまとした用事に走りまわっている。このコンクールの晴れの舞台にも、客席の方について、じつと講評を聞いているが、その横顔がなにかを耐えているように見えて、いじらしかった。それに今年の三年生たちである。彼らは前任の菅野悦夫先生の指導をじゅうぶん受けている。先生が今春二月、心臓病で急せいでいされたとき、その告別式で彼らは文字どおりどうこくした。そして虚脱放心の状態にあつたとき、新任の千葉先生とめぐりあつたのである。

彼らは息をふきかえした。そしてベートーヴェンの序曲コリオランに立ちむかつたのである。そして先生が生徒を引っ張り、生徒が先生を引っ張っていくような関係が、管弦楽部を取り巻く私たちにも感じられるようになった。

千葉先生が「いつのまにか、私は管弦楽部にのめりこんでしまった。そうさせたのは、生徒たちのあのひたむきな練習態度であつた。」と述べたそのことばでも推測がつく。そして師弟ともども、日曜も夏休みもなく、序曲コリオランにのめりこんでいたのであつた。

伝統とはこういうことをいうのであろう。かりに指導者が代わつたとしても、いいところは引き継がれ脈々と息づいて、いざという時にその見えざる力がじゅうぶん発揮されるそれをいうのであろう。車は四号線より百十八号線に折れて走つた。車窓に見える燈もまばらになつてきた。管弦楽部員の一人一人の顔が浮かび、そして消えていった。東北大会出場のこの朗報を届けたら、生徒たちはどう反応するだろう。私自身、生徒たちに開口一番、なんと言つたらよいのであろう。そのことはを探しながら、なんとももどかしく、助手席に身を沈めているのであつた。

(石川町立石川中学校教諭)